

小さなネズミはジャングルの地面を足踏みしました。それから地面に耳を当てました。自分の強い足踏みで、世界が揺れているのではないか、知ろうとしたのです。「僕は世界で一番強い動物だ」とネズミは叫びました。「そんなことゾウに聞かれるんじゃないよ」と小さなネズミの叔父さんが言いました。「ゾウは力強いんだよ。ゾウはお前が偉そうに言うのなんて、聞きたがらないよ」

「ゾウってどこにいるんだい？」小さなネズミが聞きました。「僕はゾウを見つけ出して、誰が一番強いのか見せてやる。ゾウを真っ二つにしてやるのさ」それからネズミはゾウを探すために歩き出しました。歩くと、小さなネズミはトカゲに出くわしました。「君ってゾウかい？」小さなネズミが聞きました。「ううん、僕はトカゲだよ」「君はとても運がいいね」と小さなネズミは言いました。「僕はゾウを見つけたら、ゾウを真っ二つにしてやるんだから」

トカゲは偉そうに言うネズミを笑いました。しかし、ネズミは足踏みをしました。ネズミが足踏みをすると、雷が起こりました。その音に、トカゲはびっくりしてしまいました。トカゲは走り去りました。「俺様がどれだけ強いのか、見せてやったぜ」とネズミは思いました。ゾウを探し出すため、ネズミはその場を去りました。

ネズミは犬に出くわしました。「君はゾウかい？」と聞きました。「僕は犬だよ」と犬が吠えました。「君ってとても運がいいね」と小さなネズミは言いました。「僕はゾウを見つけたら、真っ二つにしてやるんだから」犬は偉そうに言うネズミを笑い始めました。しかし、ネズミは足踏みをしました。足踏みをすると、犬の飼い主が口笛を吹きました。犬は振り返り、反対方向へ走り去って行きました。「俺様がどれだけ強いのか、見せてやったぜ」とネズミは思いました。ゾウを探すため、ネズミはまた歩き始めました。

小さなネズミは、川に辿り着くまで歩きました。大きな灰色の動物が、川のそばに立っていました。山のように大きい動物です。足は木のように太っています。それはそれは大きな耳と、長い鼻がありました。ゾウは、体を曲げました。ゾウは小さなネズミを見ると、川から水を飲みました。小さなネズミは地面で揺れる、綿ぼこりの点のように見えました。

「おい」小さなネズミは言いました。「お前がゾウか？俺は世界で一番強い動物なんだぞ。もしお前がゾウなら、俺はお前を真っ二つにしてやる」ゾウはこのおかしなことを言う動物に笑い始めました。ゾウが笑うと、ゾウの鼻から、水が吹き出てきました。勢いよく出てきた水は、小さなネズミを飲み込んでしまいました。ネズミはくるくると転がっていき、もう少しで溺れそうになりました。

ネズミがようやく起き上がる頃になると、ゾウはとっくに去っていました。ゾウはばかげたネズミをびしょ濡れにし、追い払ったのです。「ゾウのやつめ、俺様がどんなに強いかわかったようだな」と小さなネズミは言いました。「大嵐の間、ゾウは逃げたんだろう。俺

様が真っ二つにしてやるってことが分かったみたいだな」

小さなネズミは伯父さんネズミに、ゾウが戦わずに、逃げたことを話しました。伯父さんネズミは友達に話しました。伯父さんネズミの友達は、世界にいる他の動物全員に話しました。人間でさえ、小さなネズミの話を耳にしたのです。

今では世界中の全員が、ゾウは、ネズミのことを怖がっていると思っています。ゾウだけが本当のことを知っています。実は、ゾウが水を飲もうとするといつも、ゾウは笑って、鼻から水を吹き出してしまうのです。